

人大会の地区予選で、ダブルスの部でベスト8に入り、県大会への出場権を得た。

クラスの中では、相変わらず無口であったが、落ち着きと自信が、浅黒い日焼けした顔に漂っていた。成績も着実に上がっていた。

互いに励みあう生徒たち

また、M男だけに限らず、6月頃から意識して指導してきた生徒たちが、少しずつ意欲的になりつつあった。悩みを持つ生徒一人ひとりが、良い意味で影響しあって、切磋琢磨し、さらにクラス全体の士気を高めつつあるように思われた。

遅刻・欠席・早退などの基本的な生活習慣については、担任としての一貫した指導を堅持した。

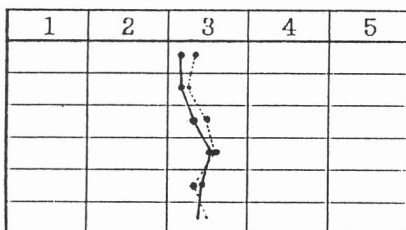
9月には、生徒会役員選挙の告示があったが、D組からは2人が立候補し、書記と会計に当選した。生徒たちは我がことのように喜びあった。

毎月、実施している漢字テストは、9月、10月と連続して学年1位となった。学習意欲に乏しかった何人かの生徒も、大きく向上した。『やらないと、クラスのみんなに申し訳ないから。』と照れる生徒たちの表情は明るく、担任にとってもうれしいことであった。

10月末、「学年懇談会」で、各クラスの概況を報告した。各教科担任・生徒指導部の先生方からは、『全体として落ち着きや真剣な取り組みが感じられる。』ということだった。

1年D組の発表に際して、担任は、10月にクラス独自に行なった2度目のYG性格検査の結果を5月の結果と比較して、クラスのプロフィールの変容を報告した。下に見られるように、抑鬱感・劣等感等が薄らぎ、クラスの全体的な和やかさや人間的成長が伺えた。

5月…… 10月——



D 抑うつ性
C 気分変化
I 劣等感
N 神経質
O 主観性
C。非協調

M男のプロフィールも、抑うつ感や劣等感が薄らぎ、一般的活動性や社会的外向などの因子が高まって、行動的に変容していた。

8 考 察

本事例は、日常観察や心理検査から「気になる生徒」であったM男に対して、本人の特性を生かしながら、学級内の相互支持的で互いに励みあう力を高め、学校生活への適応と問題行動の予防を図ったものである。また、その際家族に対して気づきを図り、家族関係を調整した。

具体的には、以下のことが指摘できよう。

(1) 学年としての計画的な**予防(指導)体制**——心理検査、中学校訪問、学年だよりなど——が生徒理解を進める上で有効に機能した。

(2) 担任としての**日常の学級全体への予防援助**——週番指導、清掃指導、早朝の発校指導、巡回指導などを積極的かついねいに実施することが生徒との間に**信頼関係**をつくった。

特に、遅刻・欠席・早退が4月～11月間で延べ8名にすぎなかったことは、その信頼関係の現れであり、**受容しつつも一貫してけじめを求める担任の姿勢**を生徒は受け止めたものと考えられる。

(3) 担任が、**生徒の個々の特性を認めて**、折々に評価していったことは、生徒の自己尊重感を高め“やる気”と**意欲を引き出す**上で有効だった。

M男が、部活動を再び開始することによって、**充実感と自信を回復**したことは、その一つである。

(4) 学級の個々の生徒の変化が、互いに良い方向に波及し影響しあって、**相互支持的で切磋琢磨する雰囲気**が形成された。それは、漢字テストにおける生徒たちの**がんばり**、生徒会行事や役員改選に際しての**積極的参加**に現われている。

(5) ホームルームの時間の**作文指導**(「家族の肖像」など)によって、**家族関係**について生徒の**気づきと洞察**を図ることができた。

M男の場合は、さらに、担任の両親との話合いが、**家庭での両親の気づきと問題点の改善・解決**を可能にしたものと思われる。